

日本における絵本の歴史的変遷  
—室町時代から明治時代(1336年～1912年)—  
Historical Changes in Picture Books in Japan :  
From the Muromachi Period to the Meiji Period(1336～1912)

早川 礎子\*

Hayakawa Motoko\*

\*日本ウェルネススポーツ大学留学生別科

[要約] 室町時代の絵本は1点ものであったが、江戸時代には印刷技術の発展により、庶民にみられるものになったが、子供向けの内容ではなかった。明治時代は全て外国のものに頼り、漢文調に直訳されたものを保姆達が幼児向けに改め保育に取り入れた。遊戯や伝統的な昔話があったが、日本古来の文化とは無関係に海外製絵本を直輸入し、先進的な幼児教育と考えられた。明治40年代には大衆的で廉価な「赤本絵本」が大量に出版された。それは当時の教育界から否定されながらも、多数の読者を得て昭和前期まで児童文化を作っていた。幼児教育は環境を通して行われる間接教育が基本であることを考えると、子ども達の絵本を選ぶ主体性によって、大衆文化の赤本絵本が選ばれてきたといえる。

[キーワード] 絵本, 子ども, 室町時代, 江戸時代, 明治

## 1. はじめに

平成29年3月、文部科学省告示幼稚園教育要領(2017)の10の項目(9)「先生や友達と心を通わせる中で絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」<sup>1</sup>。話す意欲や伝える喜びの感性を育むことが領域「言葉」の援助で求められる。相手との心のつながりの中で言葉が生み出されていくような生きた言葉の育ちを大切にしていることを示している<sup>2</sup>。領域「言葉」では「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。」と示される。その「ねらい」として絵本については、「3.日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる。」とある。その内容では「(9) 絵本

や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう。」と示されている。つまり、話す意欲や伝える喜びの感性が育まれる幼児教育の特性を、絵本や物語等の児童文化財等により引き出すことを目的としている。内容の取扱い(3)(4)をみると

(3) 絵本や物語などで、その内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージをもち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること<sup>3</sup>。

保育学では人的環境・物的環境・社会環境・自然環境が幼児にとっての身のまわりの環境であり、環境を通しての間接的な教育方法が基本となっている。幼稚園教育要領解説

に見られるように児童文化財の絵本は、子どもの言葉を生み出す物的環境のひとつとして言語発達の三項関係の対象と保育学では位置づけられている。そして、絵本は物的環境においては言語発達のための三項関係の自己・他者・モノ(対象)として捉えられている。

しかしながら、創成期から現在みられる絵本は今日の絵本のように子どもの興味関心を考慮したものであったのだろうか。

## 2. 研究目的および研究方法

本稿では、室町時代から明治時代まで絵本の先行文献を調査し、歴史上の創成期の絵本が子どもの興味関心を意識して作られていたかを考察していきたい。

初めに我が国の絵本の定義と領域「言葉」における絵本の役割を踏まえて整理する。次に、子どもの言葉の発達を牽引していく児童文化財の絵本の歴史的変遷を絵本が作られ始めた室町時代から明治時代までの絵本を整理する。最後にその歴史的変遷について考察し、特徴を考察していきたい。

## 3. 絵本の定義と領域「言葉」における絵本の役割

絵本は領域「言葉」のみではなく、他の領域と関連がある。それにより、幼児の言語活動は豊かになり、言語の指導効果が一層高まってきた。絵本とは、書籍の形態をもって、絵または絵と文の融合から生まれる芸術と定義される。原則として、絵の比重が形式的にも内容的にも、その本の半分以上を占めている。

その実践報告が、教育学、読書科学、発達心理学分野から多く指摘されている。1980年代頃から絵本場面での母子作用を取り上げた研究は盛んにおこなわれてきた。

発達心理学の視点から菅井(2011)は、観察調査によって、絵本場面での指差し、指差し対象、発話を全て文字化して分析した結果、幼児が紙面上を超えた対象への指差し「不在対象」、絵本場面での不在対象への共同活動が見られたことを報告している。これは、幼児の言語の非

言語形式から言語形式への発達過程を示している4。石崎(1995)は、発達段階別に好まれる絵本について調査し、その相関関係について指摘している5。

基本的な児童文化財の選択基準としては①受容した前と後とで、幼児がどう成長するか②そのテーマが将来の問題解決となり得るか③興味性があるかである。

保育者養成校で私は言葉の指導をする立場に立つにあたり、児童文化財それぞれの特質を理解し、その技術や方法を習得し、適時に効果的に活用することができる指導法を考えていかなければならない。

## 4. 室町・江戸初期の絵本の特徴

絵本の源である絵巻物は、平安時代から発する。平安、鎌倉時代では裕福な階層の子ども達には絵巻物を見る機会もあったが、庶民の子ども達に口伝えの物語しかなかった。室町時代には多くの物語が生まれ、様々な形態の本がうまれている。そして、それに続く江戸時代には木版による絵入り本の出版が盛んになり庶民も本に親しむようになる。

室町には、御伽草子または、室町時代物語といわれる数百の物語が存在した。絵巻物は草子体という種類の本で一点一点が手作りで豪華であり、多くの人々の目に触れるものではなかった。

その後、草子体または、冊子体と呼ばれる和綴じの本で御伽草子が書き留められるようになる。その中に、奈良絵本といわれる極彩色の豪華絵本がある。これも、一点限りの手作り本で限られた人々の目に触れるだけだった。多くの庶民が御伽草子を読む機会を得られるようになったのは、丹緑本や紅刷本など、黒一色の木版刷りの絵にわずかな色を注した挿絵を入れた本が普及し始めた頃からである。

江戸の初期、大阪の渋川清右衛門が23編の話を選んで横長の墨摺りの本に仕立て、御伽文庫として売り出すなど、いくつかの版元

が木版刷りの本を出版したので御伽草子は広く読まれるようになった。以上の歴史背景から、庶民のもとに物語が届くためには、木版刷りによる大量印刷による出版が必要であったことが読み取れる。

それは、京都、大阪という上方の文化・経済の中心地域で可能だった。上方で出版された絵本のうち、特に豪華な風俗絵本などではなく、子供も読んだのではないかと思われる作品は江戸時代初期に出た「初期上方子ども絵本」である。

「初期上方子ども」絵本に続く時期に江戸で出版されたのが、「赤小本」や「雛本」という小型の絵本と、それに続く「中型絵本(中本)の赤本」であった。

上方絵本は大型絵本を中心に出版され続けた。表紙に変遷があることや多様な内容の作品があった。本の形式にとらわれない1枚刷りのおもちゃ絵本、立版古、絵双子などが盛んに出版された。上方絵本には上方文化の影響が見られ、登場する地名や事物、ことばに上方独自のものが見いだされる。絵柄にもその画風に絵師の個性とは別に上方風が感じられる。内容は多様であるが、上方の文芸・文化が反映されている。しかし、この時代においては大人と子どもの本の区別はなく、絵本は子どもの興味関心に独自のものではなかった。

## 5. 江戸中期の絵本の特徴

寛文(1661～1681)、延宝(1673～1681)頃、赤本と呼ばれる丹色の表紙の絵本が出版された。宝永(1704～1711)には中本(18×13センチ)形式のものが出現し、この形式は草双紙に継承された。草双紙は赤本、黒本、黄表紙、合巻に分かれる。以後にも多種多様あったにもかかわらず、子どもの読み物、絵本といえば「赤本」という名称が定着し、明治以降にも「明治赤本」など「赤本」という名称を子どもの読み物に付ける傾向が見られるほど、赤本は独特な雰囲気をもって人々に浸透

していく。少し遅れて黒い表紙の黒本、青い表紙の青本も出現した。内容は黒本、青本が赤本を引き継ぎつつ、複雑な筋展開や絵柄を持ち、演劇の影響を色濃く受けているのに対し、黄表紙の作品の中には、それまでに少なかった諧謔性をもつものが現れ、大人の読者を増やした。黄表紙には、武士との二足の草鞋を履いた作家が現れ、粋や通、生半可などの価値観が見られ、時にパロディともいえる作品であった。特徴的なことは、多色刷りの表紙絵は一続きの絵となる工夫がされていることである。草双紙は子どもの読み物としての広がりを見せていった。

以上、江戸初期の絵入り本は大人の読み物と子どもの読み物を明確に区別していなかったことがわかった。子ども用の絵本は、大人用の物語を利用して作ったと思われるものを多く、両親が子ども達の成長を願い、早くから大人の世界を垣間見させたいという思いに繋がっていた。また、文章が長いものもあり、親は子どもに識字力と読解力を期待していた。

## 6. 明治時代の絵本の特徴

明治初期の絵本として、明治赤本が挙げられる。本文5,6丁、和装袋綴じの小型本で、明治初年から20年代にかけて盛んに作られた。江戸中期の赤本以来、大衆向けの絵入り本として盛行していた草双紙が、明治に入り子ども相手の冊子として定着し、内容は昔話を中心に講談物や芝居噺を簡略化したもので、初期は墨摺単色が主であったが、明治10年代には色鮮やかな木版多色刷りが全盛となった。20年代には表紙は木版多色摺、本文は細密な銅板多色摺の小型本が大量刊行された。1876(明治9)年に、東京女子師範学校に敷設して幼稚園が創設されたのが、我が国の幼児保育施設の始まりである。3歳から6歳児を保育の対象として保育時間は5時間となっていた。保育内容は第1物品科、第2美麗科、第3知識科の3つの科目に分かれ、その中

には 25 の子目が含まれていた。子目はフレールベルの恩物がほとんどで、その他に唱歌、遊戯、逸話、博物館理解、体操などがあつた。

「唱歌、遊戯、逸話などは全て外国のものに頼り、漢文調に直訳されているものを当時の保母達が幼児向けに改め保育に取り入れました。したがって、保母の苦勞は大変なものであつたとも言います。しかし、幼児向けに改めたいと言っても文語調のもので幼児達は難しい歌を歌ったり、難解な話を聞かされたりしていたのです。日本にも昔から伝わるわらべ歌のような遊戯や伝統的な昔話があつたにもかかわらず、そのような日本古来の文化とは無関係に海外のものを直輸入し、それぞれ先進的な幼児教育であると考えられていました。6」

草双紙等は、すでに絵本の萌芽が見られたものの、海外のものがそのまま教材として用いられていたことが読み取れる。

明治 30 年(1870~1906 年)代に入り、石版技法を簡易にしたジंक平板印刷法が普及するとカラー印刷による出版が飛躍的に増加した。明治 40 年代(1907~1912 年)には大衆的で廉価ないわゆる「赤本絵本」が大量に出版されるようになる。当時の教育界から否定されながらも、多数の読者を得て昭和前期まで児童文化の一側面を形作っていく。各見開きで絵と文が拮抗する「絵本」の形態が実現した。1908 年(明治 41)巖谷小波による「お伽画帳」叢書の刊行が開始され、翌 1909 年まで 25 冊の発行が確認されている。四六版(18.5×12.5cm)石版四色片面二色刷り、中綴、16 頁の小冊子で内容は小波が手掛けてきた絵本の昔話・御伽話を平易・簡略化したものだった。

## 7. 結論

創成期の絵本は豪華な一点物として作られ、内容は子どもの興味関心を意識して作られておらず、大人と子どもの絵本は未分化であつた。その後、印刷技術の発展で、絵本は

庶民にもみられたが、子ども向けの内容ではなく、明治時代は全て外国のものに頼り、漢文調に直訳されているものを保母達が幼児向けに改め保育に取り入れた。遊戯や伝統的な昔話があつたが、日本古来の文化とは無関係に海外のものを直輸入し、先進的な幼児教育であると考えられた。明治 40 年代には大衆的で廉価な「赤本絵本」が大量に出版された。それは当時の教育界から否定されながらも、多数の読者を得て昭和前期まで児童文化を作っていた。

幼児教育は環境を通して行う間接教育が基本であることを考えると、子ども達の絵本を選ぶ主体性によって、大衆文化の赤本絵本が選ばれてきたといえるだろう。

## 引用文献

1. 文部科学省・厚生労働省・内閣府(2017)『平成 29 年告示幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領(原本)』チャイルド社, 7-21
2. 福崎淳子・高梨瑛子(2010)「幼稚園における言葉の育ちを小学校教育へとつなげるための課題」東京未来大学研究紀要第 3 号, 20
3. 文部科学省(2017)『幼稚園教育要領平成 29 年告示』フレーベル館, 19-20
4. 菅井洋子(2011)「3 歳未満児の絵本場面における対象中心共同活動の発達の变化-絵本の紙面上を超えた「不在対象」への指差し-」日本心理学学会大会論文集, 79
5. 石崎理恵(2025)「絵本から見た子どもの世界-絵本研究の動向-」金沢大学教育開放センター紀要 15, 27-35
6. 森上史郎・小林紀子・若月芳浩(2009)『最新保育講座①保育原理(第 3 版)』, p127

## 参考文献

1. 鳥越信(2001)『はじめて学ぶ日本の絵本史 I 絵入り絵本画帳・絵ばなしまで』ミネルヴァ書房
2. 鳥越信(2002)『はじめて学ぶ日本の絵本史 II 15 年戦争下の絵本』ミネルヴァ書房